

「むのたけじ氏を追悼して」

2016年08月27日

『週刊金曜日』の8月26日号に、私の下記の投書が掲載された。牧師を隠退してから、投稿するようになったが、今回で、10回掲載された。私の言葉を読んでくれることは率直にうれしいことである。

むのたけじ氏が8月21日、老衰のため101歳の生涯を終え逝去した。むの氏は、反戦・平和を訴え続けた反骨のジャーナリストとして知られている。東京外国語学校（現・東京外国語大学）を卒業後、『報知新聞』、『朝日新聞』の社会部記者として働き、インドネシア上陸作戦に従軍した経験もある。アジア・太平洋戦争で大本営発表をそのまま報道した責任を負って、敗戦の日に新聞社を退社したという。

1948年に故郷の秋田県横手市でタブロイド判2頁の『たいまつ新聞』を創刊し、時事問題を独自の視点で分析、批判して、発信し続けた。78年に『たいまつ新聞』は780号をもって休刊したが、その後は、執筆や講演活動を行い、市民の側に立つジャーナリズムを貫徹した。最近、秘密保護法や安保関連法などに対し、戦争に向かう政治状況であると激しい批判を展開していた。民主主義を実現し、平和を構築するために、生活と言葉をかけて闘った生涯であった。

今年5月3日の憲法記念日、東京臨海広域防災公園で開かれた憲法集会に車椅子で参加し、大声で力強く下記のような主旨のアピールをした。（自分の戦争体験から、戦争は相手を殺さなければ、こちらが殺されてしまう。道徳観が壊れた無様な殺し合い、そして物を盗んだり、女性に乱暴したり、証拠を消すために火をつけたりする。これが戦場で戦う兵士の実態である。戦争によって、社会の正義は実現できない。戦後、憲法九条こそが人類に希望をもたらすと受け止めた。70年間、国民の誰も戦死させず、他国民の誰も戦死させなかった。この道は間違っていない……）

2011年出版の『希望は絶望のど真ん中に』（岩波新書）に、このような一節がある。「絶望と見える対象を嫌ったり恐れたりして目をつぶって、そこを去れば、もう希望とは決して会えない。絶望すべき対象にはしっかりと絶望し、それを克服するために努力をし続ければ、それが希望に転化してゆくのだ。そうだ、希望は絶望のど真ん中の、そのどん底に実在しているのだ」13年の著書『99歳 一日一言（岩波新書）』の12月1日の記事には、「必ず来る死に眼をつぶらない。自分で納得して死のう。そのためとことん生き抜く」と書いている。むの氏は絶望を体験し、死を見据えて、今を懸命に生きたのである。

本誌「話の特集」で、むの氏は「たいまつ」を連載し、7月15日号の主題は「子どもは人類の根幹」というものであった。本文にはこのような記述があった。「相手と本気で付き合いたいなら、おなじ目線が必要です。子どもは一人の人格を持った独立した人間とみて付き合い、導くべきです。（中略）幼い子どももまた人類を構成する大事なひとつのかたまりで、それが人類の根幹である」その文章は、弱く小さき者の命を愛おしむ「愛と正義」に貫かれていた。むの氏を追悼し、志を継ぐ者でありたい。

言葉は心の中から出てくる。むの氏は敗戦時の挫折、愛する家族との死別、重い病など、深い絶望を体験し、また死を見つめて言葉を紡ぎ出してきた。見える現象を追うだけでは事柄を捉えられない。見えない奥底を覗き込む時、人と社会の真実と虚偽が見えてくる。むの氏の言葉の迫力は、この深みにあったのではないか。